

## 宮澤所長退任記念特集によせて

本号は、宮澤健一先生の社会保障研究所長退任を記念して編集されたものである。宮澤先生は1990-95年の5年間、所長を務められたが、1985-86年には参与、1986-90年には理事の職にあり、あわせて10年間、社会保障研究所の運営に尽力された。

社会保障研究所は1965年に設立され、すでに30年の歴史をもつ。その間、経済社会の変貌とともに社会保障をめぐる問題が多面的な展開を遂げるなかで、本研究所は社会保障に関する基礎的かつ総合的調査研究に従事し、わが国における社会保障研究の中核としての役割を担うと同時に、その成果を広く世に問うことによって社会における現代福祉国家の認識を深めることに貢献してきた。

宮澤先生は近代経済学の研究者としての深い学識をもつばかりでなく、経済の根底にある制度や組織の経済分析に強い問題意識を抱かれ、こうした立場から社会保障制度の研究に取り組まれたように思われる。先生は、福祉ニーズの「普遍化」と、福祉と産業社会との「連動化」との2つを現代社会の動向を見る際のキーワードとして設定されているが、このような視点は、制度としての社会保障を経済的に分析するという先生の問題意識を端的に表現したものであろう。また医療や福祉の産業連関分析という先生の業績は、この問題意識の独創的な具体化といってよいであろう。宮澤所長の下で研究所が行った研究プロジェクトは、「福祉国家の政府間関係」「ヴィネット方式によるアンケート調査による適正な年金給付額の推計」「女性の経済的自立と社会保障」「社会保障の新しい財源政策」「EC統合とECの社会政策」「現代家族と社会保障」「高齢化社会における介護ネットワークの構築」「医療サービスの変化と医療費変動の要因分析」「社会福祉における市民参加」「企業内

福祉と社会保障」などである。

以上のような研究所の中核的事業に加えて、宮澤先生の貢献として忘れることのできないことは、一方で、社会保障統計のデータの基礎を整備する長期的なプロジェクトを開始したことである。これはきわめて地味な仕事であるが、重要なものである。その最初の成果は『社会保障費推計の基礎と展望』として刊行された。他方で、先生のもうひとつの貢献は、本研究所を中心に行われてきた研究の蓄積を体系的に整理し、社会保障の研究および政策立案のための基盤を構築したことである。『リーディングス 日本の社会保障』（全4巻）、および『社会保障論の新潮流』の刊行がそれであって、本研究所が1985-89年に刊行した主要国別の社会保障制度の研究（全6巻）と並んで、研究者にとっての不可欠の文献となっている。

本号は、宮澤先生の所長時代にともに働くという栄誉を得た人たちが、先生への敬愛と感謝の念をこめて作ったものである。私たちは、先生が今後とも、社会保障についての研究と政策形成に大きな役割を演じて頂くことを心から願っている。

塩野谷 祐 一

（しおのや・ゆういち 社会保障研究所所長）